



若林 尚 希

Naoki Wakabayashi

日本文理高校 3年・下関

野球は人として 大きく成長させてくれるもの

夏の甲子園準優勝大変おめでとうございました。大会を振り返ってみて、どうですか？

甲子園大会では、決勝戦という最後の試合までみんなと一緒に野球をやることができました。日本文理チーム全員の気持ちがひとつになった大会で、自分やチームにとって「最高の夏」でした。

若林さんにとって、小学校時代から9年間バッテリーを組んできた伊藤さんの存在は？

野球は、小学校時代に「一緒に野球をやろうぜ」と伊藤から誘われたのがきっかけで始めました。自分が野球を続けているのは、伊藤が隣にいたおかげです。伊藤は、良きライバルでもあり、人として、友人として、ピッチャーとして頼れる、信頼感のある存在です。

二人を目指している野球少年たちにメッセージをお願いします。

甲子園の決勝戦もそうですが、あきらめない気持ち大切です。その気持ちがあれば、何が起きるか分からない。その気持ちを持って練習に取り組めば、必ず良い結果がついてくると思います。

二人の活躍は、大勢の村民が大きな夢と感動をもらいました。村民の皆さんにひとことお願いします。

甲子園大会準優勝まで勝ち抜くことができたのも、大勢の村民の皆さんからのご支援、ご声援があったからこそです。また、甲子園球場に大勢の方が応援に駆け付けてくれました。特に、試合前の甲子園球場入口での声援に、とても勇気をもらいました。ありがとうございました。



写真提供…新潟日報社

「大きな夢と感動」

日本文理高校バッテリー

勢の人が応援に駆け付けてくれて、とても力になりました。若林さんは「甲子園での準優勝は、多くの皆さんからの応援があったからこそです」と喜びを語っていました。

「為せば成る」大井道夫監督が講演

表彰式後は、選手二人の恩師である、日本文理高校野球部の大井道夫監督を招いて、「為せば成る」を演題に講演会が行われました。

大井監督は「皆さんの声援のおかげで甲子園でも頑張ることが出来ました。ありがとうございます」と、村内外から集まった約三百五十人の皆さんに熱く語りかけました。



大井監督から、野球の指導方法や甲子園での秘話などを熱く語っていただきました。



をありがとう」

に村から感謝状を贈呈

十月三十一日、第九十一回全国高等学校野球選手権大会で、県勢初の準優勝を果たした、日本文理高校の投手・伊藤直輝さん（上関）と捕手・若林尚希さん（下関）に地方自治功労者として、村から感謝状が贈られました。

二人はバッテリーとして全試合にフル出場し、県勢初の準優勝に大きく貢献する大活躍。特に、決勝戦の最終回に見せた日本文理高校の「最後まであきらめない姿」は、村民をはじめ日本中の人に感動を与え、関川村の名を全国に広めてくれました。

表彰式では、平田大六村長が「バッテリーの二人は、約七千人の村民に大きな自信を与えてくれました。村の歴史に残る活躍をありがとうございました」と感謝状を贈呈。伊藤さんは「村から大



伊藤直輝

Naoki Ito

日本文理高校3年・上関

野球は自分にとって 親みみたいな存在

夏の甲子園準優勝大変おめでとございました。大会を振り返ってみて、どうですか？

甲子園大会では、野球は一人でやるスポーツではないと改めて実感しました。色んな方々の支えや応援があったからこそ、決勝戦まで勝ち抜いて準優勝することが出来たと思います。

伊藤さんにとって、小学校時代から9年間バッテリーを組んできた若林さんの存在は？

これまで自分の人生の半分を、若林と過ごしてきました。すれ違いや意見が合わない時など、うまくいかない時期もありましたが、最後の夏、最高の舞台、最高のゲームを若林と出来たことを、とてもうれしく思います。若林は、自分を成長させてくれる存在でした。

二人を目指している、野球少年たちにメッセージをお願いします。

試合に勝つために大切なのは、チームワークです。でも、チームワークは勝手には生まれません。厳しい練習を、チームみんなで頑張り、乗り越えることでチームワークが生まれます。

二人の活躍は、大勢の村民が大きな夢と感動をもらいました。村民の皆さんにひとことお願いします。

関川村の皆さん、ご支援ご声援ありがとうございました。大会中、応援バスなどで球場に駆け付けてくださった皆さん、村から応援を送ってくださった皆さんのエールは、自分やチームの力になりました。今後、自分は大学へ行き、プロ野球選手になるために精一杯頑張りたいと思っています。本当にありがとうございました。